

『松陰中納言物語』 語法考

○ 本稿の目的

古典語文法は、古典文に用いられていることばの形態的・統語的規則を体系化したものであって、古典文法の包括的な記述のためには、古典文にどのような語法が存在するか、精査されなければならぬ。ところで、平安時代の前中期の和文資料に存する語法を古典文法の標準と考えるならば、平安時代も後期になると、その標準から外れた語法も見られるようになってくる。

- ① これも前の世のことならめば、かかる筋にて（とりかへばや）
- ② おくれなばもとのしづくに似たりつつ夜半の月をもうかが見るべき（穂久邇文庫本・苔の衣）
- ③ この殿（＝薫）の御かへりみのよろづにかたじけなき。…便宜

小田 勝

には「薫^二」よきさまに啓し給へ。（山路の露）

例えば、中古の標準的な語法では、①のように、接続助詞「ば」（已然形接続）内に助動詞「む」が現れることはなく、②のように接続助詞「つつ」内に助動詞「たり」が現れることもない（小田勝（二〇〇六）第五章）。また、③では「啓す」が皇后・皇太子以外の者に対して用いられている。このような例は、中古の標準的な語法からすれば違例であるが、必ずしも孤例ではない（類例が存在する）のであって、単純に「後世の違例」として無視して済む問題ではない。

古典文法の包括的な記述にあたって、例えば、助動詞「めり」には連用形が存在し、「めりーき」、「めりーつ」という承接例が存在するが、「めりーけり」という例はあるのかという問題に、「中古の標準的な語法には存在しないが、『栄花物語』には1例存する^④」という情報がありたい、打ち消された事態に対する希望（「ししたく

ない」の意)はどのような表現をするのかという問題に、「ゝまはしからず」、「ゝまうし」、「ゝうし」を用いる。「×ざらまほし」や「×ざらばや」は存しない。ただし中世の文献には、「ざらばや」^③「じばや」という例が存する」というような情報がありたい、と思う。このような観点から、中世の擬古的文章をみると、そこどのような語法が——違例であれ——存在し、それがなぜ存在し、どのような性格をもつものなのか、ということを含括的に知る必要があると思われる。^④しかし、中世の擬古的和文体の文章、例えば中世王朝物語の言語について、その実態の記述の蓄積は未だ充分ではないように思われる。

そこで、本稿では、そのCase Studyとして、比較的に特異な語法の多い『松陰中納言物語』を取り上げて、その言語にみる特異な語法について、記述する。記述の構成は、小田勝(二〇〇七)の体系に従う。

一 先行研究の指摘

本物語にみえる特異な語法については、すでに田淵福子(一九九九)の研究があり(以下『田淵』と略称する)、本物語に散見されるI～IVのような特異語法について報告されているので、まずこれ

を概観する。

I 已然形終止(上に係助詞「こそ」がなく、已然形で文を終止するもの)が四六例みられる。^⑤

・露は朝日にきら／＼とにほひわたりて、色々さける花のうへに、玉をこぼしかけたらんやうにいとおかしくみゆれ。みやりの山には紅葉ゝの色ことなるに、霜のしろくをきけるは、なにゝてか染つらむと思ひやらるれ。(一四ウ・地の文)

II 東宮・后以外の者に対して「啓す」が用いられている。

・此よし「山井中納言ニ」けいし給へ。(一三オ・会話文)

・「松陰中納言ハ」ひとかたならぬ御けしきにてこそ」と「侍従ガ帝ニ」けいすれば(一二ウ)

『田淵』によれば、本物語中に「啓す」は三七例用いられているが、正しく東宮・后・女院に用いられたのは一四例で、残りの二三例はそれ以外の者(帝および臣下)に用いられているという。

III 四段活用動詞に(助動詞「す」ではなく)「さす」を付けた例が四一例みられる。

・藤の内侍に琴をひかせて(一二オ)△「させ」は使役▽
・いまこそ人ずくになにさぶらへ。つま戸ぐちにたゝせてまたさせ給へ。(五二九オ)△「させ」は尊敬▽

IV 「御覧じ給ふ」という敬語の重複が数箇所みられる。

- ・ちかき程にうへのこきでんの花を御らんじたまふべければ（一
8オ）

- ・浪にうつろへるかけを御らんじたまひて（一12ウ）

『松陰中納言物語』には、右のⅠ～Ⅳ以外にも、多くの注目される語法がみられる。以下、節を改めて順次みてゆくことにする。

二 動詞・述語・時間表現

①活用型について。中古語と活用の型を異にする動詞に次のようなものがある。

- ・…とばかりの給はすに（二15オ、三25ウ、五33オ、五39オ）

△下二段↓四段▽

- ・…とのたまはせば（四1ウ、五25オ）△下二段↓四段▽

「のたまはす」は本来の下二段も用いられている（「のたまはせず」五39オ、「のたまはすれば」五38ウ、五39オ、五41ウ）。

- ・「冷泉院ノ」御心にまかせ給へるやうにけいせさせ給ふべ
れ。（四2ウ）△下二段↓四段▽

- ・ともに御心もみだるゝ程におぼすれど（四5オ）△四段↓下二
段▽

- ・玉のうちにくはんぜをん（＝観世音）の御かたちのあらはせさ

せ給ひて（五7ウ）△四段↓下二段▽

- ・…とひとりごちさせ給ふ。（三30ウ）△四段↓上二段▽

- ・三の宮の御元服を、内のでん上にてとおぼし過ぎさせおはせど
（四1オ）△サ変↓四段▽

- ・御文を御らんじさせて（二23ウ、他に一7ウ、三5ウ、三26ウ、
三31ウ）△サ変↓上二段▽

- ・せめて田鶴君をとどめさせ給ふやうにけいし（＝啓し）させ給
へ。（三8ウ）△サ変↓上二段▽

②使役態について。使役の助動詞「す」は、本来の下二段

（馬をはしらせて）三8ウ、「御船をとばせて」五40ウ）のほか、
サ変（または上二段）の例がみえる。

- ・つま戸ぐちに「コノ人ヲ」おろし置き、馬ははしらしてにげて

いぬ。（二22オ）

動詞「す」の使役態は本来、

- ・装束などは乳母、また故上の御人どもなどしてせさす。（枕草
子）

のように、「せさす」であるが、現代語の「させる」に相当する下
二段動詞「さす」を用いた例がみえる（本来の「せさせ給ふ」の形
もみえる。「あないせさせ給ひて」一8オ、「あないせさせたまへる
に」五23ウ）。

・よしやそれ、侍従にたいめんさせよ。(一三ウ)

・あま共をめして、かづき(≡潜水)させ給ふ。(二16オ)

・我ゆへにつみ(≡罪)させ給へるにやと(二28ウ)

・御前にてうゐかうぶりさせてとおもひつれど(二38ウ)

③助動詞「らる」について。「奉る」に尊敬の助動詞「る」を下接させたと考えられる例がみえる。

・「下総守ハ右衛門督ヲ」とねんごろにかしづきて、我が御もとへ入れ奉らる。(二1オ)

・「山井中納言ガ北方ノ」御手をとり出し奉らるゝに(五13オ)

「給へらる」「のたまへらる」という奇妙な形が散見されるが、これはおそらく「給へり」「のたまへり」の「り」の未然形に尊敬の助動詞「る」を付けたものと思われる。

・みや(≡東宮)は、ひんがし山の春を見たまへられんとて、中

納言の山の井へいらせ給へり(三1オ)

・中納言(≡山井)は「藤内侍ノコトヲ」せちに思ひたまへらるゝとはきゝつれども(二31オ・頭中将詞)

・ゆきたまふて見たまへらるゝに(二34オ)

・をそれたまへらるれども(四5ウ)

・…との給へらるれば(二10オ、ほかに、三6オ、三17オ、三32ウ)

次例の「らる」は自発でも尊敬でも上接語と意義が重複する上、上の「給ひ」も奇妙な形になっている。

・琴によりかゝれる「姫君ノ」さまのいとらうたげにみえ給ひらるゝまゝに(二5ウ)

次例のような可能表現の重複は、中古にもみられるものである。^⑧

・えもいはれぬかたちなるものどものよりくるに(四20ウ)
次例は「る」の已然形「るれ」とありたいところである。

・明くれふる郷の空のみおろされば(五24オ)

④肯否表現について。断定の助動詞「なり」では、「〜という」の意の「なり」に注意される。^⑨

・うき恋のためしにはありはら也けるおとこのたえ入りし思ひも身にしられてこそ(一19オ)

連体修飾の「ざる」は中世では普通である(中古でもまれにみられる。「過ぎにけらしな妹見ざる間に」(伊勢))。

・…とかけるすぢの露たがはざる物から(三9ウ)

・思ひかけざる後の世のつとをもしけれど(二22ウ)

⑤時の助動詞について。受身形に「つ」が用いられた例が存する。

・もしはかられやしてまし(二29オ)

右例は、中古の標準的な語法では「はかられやしなまし」となると

ころである。^⑩

次例の「つ」は、終結相ではなく、現在進行中の事態を表している。^⑪

・「船内ヲ」見めぐらし給へるに、侍従がつゝましげにてありつるを、「…」とうちなみだぐませ給ふ。(二三五ウ)

・大弐のもとに有つるところきゝつれ。(四一七オ)

助動詞「り」が、四段・サ変以外の語に接続した例がみえる。^⑫

・御隨身などたまはせるきはなどの(三四五ウ)

・御堂のしやうとん(＝莊嚴)はてる日に(五六ウ)

次例の「き」は、最直前の事態に用いられている(このような「き」は中古には存しない)。

・「…」と「行方ヲ」いふに、御むねのふたがりけれども、御行衛をきかせ給ひし事のうれしくて(五二七オ)

サ行四段の語と助動詞「き」の連体形「し」との接続に誤用がみえる。

・…といひまぎらはせしに(二三一六オ)

右例は、標準的な語法では「まぎらはししに」とあるべきところである(参考「ただ食ひに食ひまぎらはししかば」枕草子)。

三 文の述べかた

⑥推定・推量表現について。中古の語法では、活用語に付く

「なり」が「こそ」の結びになるときは、必ず推定伝聞である(北原保雄(一九六七))が、本物語では、その制約は失われている。

次例の「こそ」の結びの「なれ」は断定と考えられる(第三例は結びも正格ではない)。

・その人をこそたづね出さぶらふなれ。(五二〇ウ・尋ね出でた人自身の詞)

・「私ハ」衣かせ山ときこえしすそ野に庵をしめて、三とせがほどこそすみさぶらふなれ(五二七ウ)

・私もあやしくこそおぼへさぶらふなり。(二二三〇オ・藤内侍詞)

「らむ」を、現在推量ではなく、「む」と同意に用いた例がみえる。

・内のおとゞは大将にて「行幸ニ」つかうまつり給はんづれども、左大将のわかくましますに、立ならぶらんも人のめたつべかれば(四二五ウ)

・花のさくらん比はかならず。(五一一ウ)

・かゝる仏の御わざをせんには、さのみなきこそよかるらめ。かへりてつみをつくるにこそあるべけれ。(五一〇オ)

反実仮想では、「しましかば…む」の句型がみえる。^⑬

・「姫君ガ」此世にだにもあらましかば、都鳥にも事とひてなぐさまめ」とて打なかせ給へば(五一〇オ)

・今をかぎりとしらましかば、後の世かけてちぎりをきてん物を

(一 27オ)

・かゝる御心としらましかば、すみ染の御袖をものはちたまはじ物を (五 23オ)

⑦命令表現について。次例の命令表現は「給へかし」とありたい。

・思ひなぞらへ給ひかし。(五 10オ)

「ゞず。」で禁止を表した例がみえる。

・四位少将は二条坊門なる所にとのづくりして(≡屋敷ヲ造ッテ)、宮(≡五宮)をむかへさせ給はん御もよひをしきらせ給ひけるに、をおほとの(≡松陰中納言)ゝわたらせたまひて、「こゝにおはせず。院へいとへだゝらぬなり。…」とのたまはすれば(四 10ウ)

⑧疑問文について。「いかなる宿のかきねにや。」(一 2ウ)、「いかゞおぼしけるにや。」(一 6ウ)、「住かたはいづちにやと」(二 5オ)のように、疑問詞疑問文に「か」ではなく「や」を用いた例がみえるが、これは中世の文献に広くみえるものである(中古では、疑問詞疑問文には、「いかなる人のしわざにか」(源氏・若紫)のように、必ず「か」が現れる)。なお、本物語には、「いかゞは思ふらんにか。」(五 5オ)のような例もある。

四 形容詞・副詞・名詞句

⑨形容詞について。「なし」の否定形「なから―ず」という形があつて、形態的に珍しいが、これは意味的には「さ(≡小さく)あらぬこそ」の誤表現である。

・鴈金の打つらねて、越路おぼえてゆるなるもいとちいさうみゆる物から、声のまたさなからぬこそ、かずのほどもおもひしらるれ。(一 12オ)

「うたてし」は、ク活用とシク活用の例が混在している。

・世のみだれにことよするこそうたてしけれ。(一 20オ)

・君のつれくならんをみるだにうたてけれ。(二 31オ)

「おほんみゆきの事しげかるに」(五 1オ)のような、助動詞の下接しない形容詞補助活用形がみえるが、これは「物憂かる音に鶯ぞ鳴く」(古今集)のように中古にもみられるもので、特別な例ではない。

⑩形容動詞について。次のような「助動詞＋げなり」の語形がみえる。^④

・君(≡山井姫君)は御人心ちもせさせ給はず、うちふさせ給へりげにて(二 19オ)

次例は「例ならずなり」の連用形だろうが、「例ならず」でよいところである。

- ・からずどもの羽さきに文のありけるを、れいならずにおぼして
(四23オ)

次例は、いわゆる「句の包摂」の例。

- ・いざよひの月、きのふのそらにもまさりがほにさし出るに(四16オ)

⑪副詞について。「あまた」を連体詞として用いた例がみえる。^⑮

- ・行幸のさま御したしきかぎりのあまたかんだちめにてつかふまつり給へるは(四26ウ)

反語を表す「やーは」から転じた、強い否定を表す副詞「やは」の例がみえる。^⑯

- ・「御身ノ文ヲ」ひきやりて(「ヒキ破ッテ」ながし給へる事もきゝしぞかし。やは、あらがひはし給はじ(「ドウシテ抗議ヲナサラナイノデスカ」)。(一19オ)

- ・ふるさと人に立まじらひ侍るとも、やは心のうごき侍らじ。
(五19ウ)

⑫名詞句について。次のような「ゝへの」という言い方が存すること
が注意される。

- ・内侍のもとへの「風ふけば草葉の露」とかけるすぢの露たがは

ざる物から(三9ウ)

- ・いづくへのよすがならん(三12ウ)

- ・内侍のかたへの文をとり出させて(三16オ)

中古語では、「昔よりの志」(源氏・若菜上)、「今からのもてなし」(源氏・松風)、「後の世までのとがめ」(源氏・薄雲)のような言い方があるが、「ゝへの」という言い方はなく、「ゝへの」は次のように「ゝ」だけで表される(小田勝(二〇〇七) 一四九頁)。

- ・少将の(「少将へ」)返事には、「……」と言へば、少将いとほしく(落窪)

- ・ただ京の(「京へ」)出立をすれど(源氏・玉鬘)

- ・御匣殿は、二月に尚侍になり給ひぬ。院の(「院へ」)御思

ひにやがて尼になり給へる「前尚侍」かはりなりけり。(源氏・賢木)

- ・あなたの(「あなたへ」)御消息通ふほど、少し遠う隔たる隙に(源氏・夕霧)

「への」の夙い例には、「中院殿への御文」(藤原俊成女「越部禪尼消息」一二五一年以後)のような例がある。

- 連体修飾句では、違例ではないが、次のような句形に注意される。
・かへりにし名残をしたはせ給ひし鴈がねも、雲めの空に聞こゆるに(三31ウ)

これは、松陰中納言が、「鴈がねニヨッテかへりにし名残をしたはせ給」うたのである。

五 とりたて

⑬副助詞について。副助詞は、「見だに送り給へかし」（源氏・須磨）のように、複合動詞の間に介入するが、次のように「動詞＋させ給ふ」の「させ」と「給ふ」の間に副助詞が介入するのは非常に珍しい。^⑮

・海士どもをめして、をのがとりくのしわざをさせ給ふに、めなれさせさへ給はねば、いとめづらしき事におぼす。（二二才）

副助詞では、「何がな」の形で用いられる「がな」^⑮、「にやあらむ」の転じた「やらん」（不確実・伝聞であることを表す）がみえる。

・「今宵はまうのぼりましますで、のどかにこそあれ。御あそびには何がな」などいひのゝしる。（一九才）

・岩戸とやらんいふなる山ざとにて（五十九才）

⑭係助詞について。次例は二つの係助詞が一つの述語に係る「二重の係り」（小田勝（二〇〇六）第四章第六節参照）の例である（結びも正格ではない）。

・…とおほせたまひぬるこそ、まことにありがたき御心にこそあらんかし。（三十七才）

次例の「こそ—も」は、係助詞の承接順の違例で、「もこそ」が正しい語順である（「東・天」の本文「ことも」を採るべきであろう）。

・大納言のかへり給はんこそもさだめなければ（二三十才）△「ことも」東・天、「こそも」九△

「もこそ」では、良い結果を予想し、それを期待する意のものがみえる。^⑯

・まだわくらむ「松陰中将ノ」心には、行末たのもしき事にもこそあれ。（二十三才）

六 複文

⑮接続助詞について。順接仮定条件を表す接続助詞「とも」の句の内部に「む」が現れた例がみえるが、中古の語法では存しない語法である（小田勝（二〇〇六）第五章）。^⑰

・其まゝありなむともしばしの程はうらむる心もなからまし。

（三十七才）

接続助詞「ものから」は、

・月は有明にて光をさまれるものから、影さやかに見えて（源氏・

帚木

のように、逆接を表すが、理由を表す「から」にひかれて近世の擬古文では順接として多用される。本物語では、本来の逆接、

・山吹の咲そむるより、物いはぬ物から、くれ行春の色をしらせがほなるに（二24ウ）

のほかに、やや変わった「ものから」の用例がみえる。⁽¹⁾

・「藤内侍ガ」橋のうへよりかへり見させ給へる「松陰中納言ノ」御おもかげの、ちいさうなり行物から（二ニツレテ）、霧にう

づもれ給ひしより、御心もかきくれさせ給へるに（二27オ）

・内侍のもとへの「風ふけば草葉の露」とかけるすぢの露たがはざる物から（二上二）、浅みどりのうすやうの、またおなじきぞなをあやしけれ。（三9ウ）

「ながら」が形容詞の連体形に承接することがあるが（憂きながら人をばえしも忘れねば」伊勢）、動詞の連体形に承接した例は珍しい（この「給ふる」は準体言だろう）。

・今さらかくとは思ひ給ふるながら、少弐のもとへまいりて（四19ウ）

七 敬語

⑩敬語について。地の文で最高敬語形「(さ) せ給ふ」が広く用いられ、敬意の減は著しい。接続も幅広く、様々な語に「(さ) せ給ふ」を付けている。次例、第一例は「見る」、第二例は「要る」(「さ」を入れるのは本物語によくみる誤用)、第三例は「候ふ」、第四例は前項が敬語形の複合動詞に「(さ) せ給ふ」を付けたものである。このような敬語形は、中世王朝物語では常態である。

・めづらしくみさせ給ひて（四3ウ、五22オ）

・…とて、いらさせ給ふべき物の具など、くらつかさにおほせごとあり。（四2ウ）

・「大弐は、『…』とて、かしらおろして宇治山にこそさぶらはせ給へ」と云に、むねつづるゝ。（五41オ）

・「御覧じはじめさせ給ひて」（二12オ）、「おぼしやらせたまへり」。（二12オ）、「おぼしわづらはせ給ひけるに」（四25ウ）、「十三夜の月をおぼし出させたまひて」（五9オ）、「さこそおぼしなげかせたまふらめ」（五10オ）、「おぼしつゞけさせたまひつづ」（五35ウ）

「給はす」を補助動詞に用いた例がみえる。

・…とくやくおぼせど、露だに心のうごきたまはせぬは、「出家シテ世ヲ」深うおもひはなれ給へるにや。（五29オ）

「あり」の主語尊敬語として、「おはす」（四26オ）、「物し給ふ」

(三21オ)のほか、「わたらせ給ふ」が広く用いられている。

・…と「松陰中納言ガ」そうし給へば、「帝ハ」こよなふ御心よげにわたらせたまひて(一13オ)

・「松陰中納言ハ」此ころは御心をほかにうつされけるにや、…君(＝藤内侍)ともかれく^くにこそわたらせ給へ。右衛門督殿のあづまにわたらせ給ふに、御心をあはさせ給はん事のありげにて(一22ウ)

・北のかたの御物ねたみのいとふかくわたらせ給へば(二16ウ)また、「います」、「ます」、「まします」も用いられている。「います」は四段と下二段の形が併存している。「ます」はサ変、「まします」は四段である。

・仏のいますかたを見させ給へれば(五22オ、五23ウ)△四段▽
・御子のいませ給はねば(五34オ)△下二段▽
・宰相中将のいしますよし(三34オ)△下二段▽
・あざりのまいりたまふて、「…」とすゝめますれば(三25オ)
・あま君のかへりますらん程は、それにわたらせ給ひて(五30オ)
・「ねぶらでまします」といぬ。(五30ウ)
次例の「まします」は「行く・来」の尊敬語として用いたもの。
・「こよひは、やはたにて御神楽まいらすべけれ。御つれく^くにあらぬやうにましますべけれ」と、のたまはすれば(五34オ)

助動詞「さす」が単独で尊敬の意として用いられた例が存する。

・…さきの右馬頭まいり給ふて、「ながき夜のつれく^くをこそ思ひやり給ふれ」とて、なにとなき世の中の物語をせさせけるに(一17オ)

・軒端の梅のほゝえめるに鶯の声のほかなるは、「松陰中納言ハ」みやこにても見なれさせけるにや、浪路の末のながめこそ、こよなふめづらしとおぼす。(三20ウ)

一語の敬語動詞に、同じ種類の敬語の補助動詞を重ねた例は、第一節にあげた「御覧じ給ふ」のほか、次のようなものがある。

・わかき御心にはいととはづかしとおぼし給へり。(四3オ、四9ウ、五7オ)
・いかゞめづらかにおぼさせ給ふらん。(四10オ)
・おさなき君だちをもよそながらも見そなはさせ給へかし。(二12オ)
・おほとのごもりまします。(三10ウ)
・うへにそうしたてまつらんも(四5オ)
「^た賜び給ふ」は、
・男子にてましますば、わらはにたび給へ。(曾我物語)
・願はくはあの扇のまんなか射させてたばせ給へ。(平家11・那須与一)

のように、中世に見られる語法で、「賜^たぶ」が話者に対して恩恵が及ぶこと、「給ふ」が「賜ふ」行為者への敬意を表し、「(私どもに)お与えくださる」、「(私どもに)ゝしてくださる」の意になる。本物語には、自称主語ではない「賜び給ふ」の例がみえる。

・「都カラノ」御をくり物のいと多かりしを、「松陰中納言ハ」あるかぎり浦のさと人、海士などの参りつかうまつれるに、たび給へり。(三37オ)

「召す」に尊敬の補助動詞を付けるのは、本物語では常態である。

・僧たちあまためし給ひて、御読経ありけり。(五16ウ)

・「帝ハ」侍従をめさせ給ひて(一22オ)

上位者の名前の引用に、次のような表現がみえる。

・あはのつばねといひ給ひつるに、そちの中納言殿かよはせ給ひて(五26オ)

現代語の「山田様とおっしゃる方がお見えになりました」の用法と同じであるが、中古では「おほきおほいまうちぎみと聞こゆるおはしけり」(伊勢)のように「聞こゆ」が用いられるところである。「言ひ給ふ」という言い方も珍しいが、「あざやかに言ひ給へるに」(夜の寝覚)のような例がある。

複合動詞の敬語形は、中古の語法では、一般に前項が敬語形になるので、次例のような場合、中古ではふつつ「思し疑ひて」となる

だろう。

・「帝ハ」うたがひおぼして、侍従をめさせ給ひて(一22オ)

「動詞＋むとす」の敬語形には、A「まかでなむとし給ふを」(源氏・桐壺)、B「まかで給ひなむとす」(源氏・桐壺)の両形があるが、本物語では両方を敬語形にした次の形がみえる(本物語には、Aの形もみえる。「御袖をとらへんとし給へど」一25オ)。

・年月のうかりし子どもをかたらひ給はんとし給ひけるに(一9ウ)

・「姫君ハ」ひきいり給はんとし給へるを(二15ウ)

・など出たまはんとはせさせ給ふ。(一25ウ)

・つま戸をさゝせ給はんとせさせ給へるに(五15オ)

次のような四段活用「給ふ」の自卑敬語使用は、誤用ではあるが、中世の文献に広くみられるものである。

・我もくはんぜをんをいのりたてまつりて、つみゆるされん事を思ひ給へるにこそ。(四24オ、二3ウ、二21ウ、二26オ、五24オ)

・「私ハ」よしなきあやまちをし給ひしより、あづまのつてをきゝたまふるにも(五21オ)

逆に、主語尊敬語「給ふ」が期待されるところに、下二段「給ふる」が用いられた例も存する。

・「姫君ガ」神かけて「私ヲ」ねたみ給ふるむくひにや（二25オ、五33オ、五40オ）

・「頭中将ハ」「…」とて、泪を袖にかけ給ふれば（三16ウ）

・「御身ガ」かくわたらせ給へぬるも（五23ウ、二9ウ、四21ウ）
下二段「給ふる」が「思ふ・見る・聞く・知る」以外の語に付いた例がみえる。⁽³²⁾

・「山井中納言ガ」へだておぼすらんと、「私ハ」心にかゝり給へつるに（五11ウ）

「思ひ過し給ふるなれ」（四2オ、五19ウ）のように「思ひ」型の複合動詞に「給ふる」を付けた例がみえるが、中古の語法では「思ひ」と後項の動詞との間に「給ふる」が割り込んで、「思ひ給へ過ぐすなれ」のようになるところである。

次の「給ふる」は客体尊敬（「見せ奉る」の意）として用いられているようである。

・その人をこそたづね出さぶらふなれ。まづ「ツノ人ニ、孫ノ」わか君をみせ給へなば、よもしのびはて給はじ。（五20ウ、松陰中納言の、「その人」（＝前右馬頭）の娘（東宮大夫の北方）に対する詞）

敬語の接頭辞「御」の用法では、敬語名詞に「御」を付けた例、
・「松陰の家の藤を御覧におほんみゆきあるべしと」（二10ウ）、

「冷泉院へおほんみゆきあるべきとて」（四25ウ）、「おほんみゆきの事しげかるに」（五1オ）

形容詞・形容動詞に「御」を付けた例、

・都の御恋しうおぼし出され給ひけるにや（二14ウ、五13オ）
・御袖をしぼらせたまふを、御いたはしく見給ふて（五11ウ、五38オ）

・御つれ／＼にこそわたらせ給ふべかめれ。（三6オ）

・「中宮ハ」御うれしげに打ゑませたまふ。（三41ウ）

動詞に「御」を付けた例がみえる。⁽³³⁾

・「御涙ぐみ給へば」（二20オ）

所有主尊敬では、次のような表現がみえる。

・つとめて「右衛門督ガ姫君ニ後朝ノ」御文やらせ給はんも、せんかたのおはしまさねば（二6ウ）

・女御の御さん（＝御座）の比もちかづかせ給ひければ（四4ウ）

・二のみやの御はらへちかづかせ給へば（四9ウ）

・れいぜん院（＝冷泉院）には、御物しづかなる春をむかへさせたまひて（四1オ）

次のような場合、敬意の対象がはっきりしない。

・かゝりし事は世にもいます物かは。（二27ウ）
・御馬をはせて見給へども、まぎれさせ給はんかたもなかりけれ

ば(五34ウ)

敬語の誤用には次のようなものがある。

・我も「松陰中納言ニ」思ひうたがはれ給ふまゝに(一20ウ・侍従詞)

・おさなき君達をいざなひ給はん(二29オ・藤内侍心内)

・かゝる御心としらましかば、すみ染の「父ノ」御袖をはなち

たまはじ物を(五23オ・東宮大夫北方心内)

第一例の「うたがはれ」の「れ」は受身で、「私が松陰中納言ニ疑はる」のだから、「奉る」などの補語尊敬語が用いられるところである。第二例、第三例も「いざなひ奉らん」、「はなち奉らじ」とあるべきところである。次例は、心内文中で、自分の行為に尊敬語を用いている。

・しぐれのけしきも、都にはやうかはりていとすさまじ。「浪のをともなれ行給はゞ」と「松陰中納言ハ」おぼすに(三18オ)
・「ふりにし都を見させたまふらん」とて、「松陰中納言ハ」立よ
らせたまへるに(五23オ) △「見むとて」でよいところ▽

八 おわりに

以上、本稿では『松陰中納言物語』に存する、中古語とは異なる

語法について、①～⑩の項目について概観した。本物語は中古和文体で著されたものであるが、中古語とは相当に異なる語法が見された。今後は、本稿の記述を土台として中世王朝物語に存する特殊語法の全体像を明らかにしていきたい。

付 語彙

本物語にみえる語彙で、注意されるものをあげる。⁽²³⁾

- ・そのころあづまのえびすおこりて、いとさうくしかりければ(＝騒々シカッタノデ)(一15ウ)
- ・けふはまがきの菊を心あてつるに、きのふの程にうつるひかはるこそ、定めなき世なりけれ(一29オ)
- ・…とうちえませ給へば、よろこぼひて(＝喜ンデ)(二18オ)
- ・露ふかき庭のえもぎ(＝蓬)にうつるを(二10オ)
- ・北のかたの御物ねたみのいとふかくわたらせ給へば、…ともにありなば、物わらはしき事もぞあらめと(二17オ)
- ・御庭の草はやうくあをみだちて(三23ウ)
- ・御さむ所(＝産所)にわたらせ給ひて(三44オ) △「Sanjo」日葡辞書▽
- ・…とて、ともにみえ給へる御まみつき、いとほなやかにみえ

させ給へり。(四4オ)

・さまくの御たま物(＝賜物)をそへさせたまひければ(四9オ)

・うかりし嶋の御住るに、おもひがけ給はぬ御ふねのよりきて(四23ウ)

・きぬわたのたぐひをそれく(＝各々)にわかち給はりければ(五5ウ)

・おさなき君だちをめされければ、ひめ君のおさなだち(＝幼イ頃ノ面影)の、まがふ所のさぶらはぬにとて(五10ウ)

・おぼろ月夜にあこがれさせたまふて(五14ウ)

・いと心もとながらせたまふて、姫君のそまゝ(＝即座ニ)わたり給ひて(五22オ)

・三位中将は旅のうらぶれとて、あそびにもかゝづらひ給はず(五28オ)

・おもへに東宮のすはら(＝座ル)せたまひけるに(五33オ)

・おもひきや身をうろくづとなしはてゝ宇治のあじろによらん物とは(五36オ)

・試楽はわたくしの家にてし侍りなん。(五38オ)

表現では、次のようなものが注意される。

・仏の御ちからをたのまんよりはと、くはんぜをんの御名をと

注

へさせたまひて(四20ウ)△「頼むしかない」の意▽

(1) ④の類例「もみちの色もゆゑふかく侍らめば」(一二五一年九月「影供歌合」新編国歌大観)、⑤の類例「昔せし隠れ遊びになりなばや片隅もとに寄り臥せりつつ」(西行・聞書集)、⑥の類例は第一節参照。

(2) 「なほさべきなめりけりと思し嘆かせ給ふに」(栄花・十二)。

(3) 「つらしとてうらみざらばや」(いはでしのぶ)、「時の君の、強くうるさき撰録臣をあらせじばやと思しめす御心の」(愚管抄)。

(4) 小田勝(二〇〇九)にも述べたように、中世の擬古的文章にみえる違例には、口頭語の反映によるものと、誤用によるものがある。国語史上の新生面は、口頭語資料から描き出されるが、一方また誤用例も重要なのであって、誤用例からは国語史上の転移や終局面(すなわち、その語法が生きた口語ではなくなったこと)が示されるのである。

(5) 本文は『鎌倉時代物語集成』により、所在は「一13ウ」(「卷一、13丁裏」の意)のように示す。伝本は、尊経閣文庫蔵本(本稿での略号「尊」)、天理図書館蔵本(「天」)、東北大学図書

館蔵本（東）、中野幸一氏九曜文庫蔵本（九）など。『鎌倉時代物語集成』は「尊」を底本とする。伝本間の本文上の差異は非常に少ない（例えば「しるかりければ」の誤りである「御けはひのしるかれけりば」（五30ウ）も「尊・天・東」で同一本文である）。

現存『風葉和歌集』（一二七一年）に不載。伝本中唯一奥書を有する「東」には建徳二年（一三七一年）に書写されたところなので、これを信じれば風葉以後、建徳以前の成立となるが、成立年代はなお不明である。

翻刻・注釈書は、『鎌倉時代物語集成』のほか、次の通り。

- ① 朝倉治彦・吉田幸一『松陰中納言物語』（古典文庫・五九）
- ② 大橋千代子『松陰中納言物語・翻刻編』（古典文庫・二八九）
- ③ 山本いずみ『現代語で読む『松陰中納言物語』付本文』和泉書院

④ 阿部好臣『中世王朝物語全集⑩松陰中納言物語』笠間書院
本文は、①は「東」に「天」を校合、②は「尊」、③は「東」、④は「九」（巻一・三）と「尊」（巻四・五）。

本稿では、『鎌倉時代物語集成』本文の独自誤謬は考察の対象としない。

・名残の浪にうちよせるけるをとりて（三29オ）△「たち

よせける」東・天、「うち寄せける」九▽

・こぞには似るべきもあらぬにや。（三45ウ）△「べく」東・天・九▽

（6）已然形終止自体は、中古から存する。「男女ノ仲ハ崩レ始メルト」なごりなきやうなることなどもみなうちまじるめれ。」

（源氏・権本）、「散る花のもとに来てしぞ暮れはつる春の惜しさもまさるべらなれ」（古今和歌六帖）、「松山の石は動かぬけしきにて思ひかけつる浪に越さるれ」（赤染衛門集）など。なお、『田淵』によれば、『夢の通ひ路物語』には已然形終止の例が一二八例みえるという。

（7）「さす」の夙い例、「御前の朽木に生ひたる菌ども羹にさせ、苦菌など調じて」（うつは・国譲下）、「七月七日、説法をさすと聞きてやりし」（赤染衛門集・詞書）。

（8）「大臣はあきれて、え物も言はれず」（落窪）、「外ヲ」えよくも見やられず」（能因本・枕草子）など。

（9）このような「なり」の古い例、「大井なる所に、人々酒たうべけるついでに」（後撰・一一三二・詞書）、「東山なる所に籠り居て」（宝物集・一）。

（10）ただし『源氏物語』にも「かのもてかしづかれつる人々は」（宿木）のような例がある。

(11) 類例、「雨のわりなく侍りつれば、やむまではかくてなむ。」
(大和)、「いといたく面瘦せ給ひつるかたち、言ひ知らず薫
りをかしげなる」(夜の寢覺)。

(12) 類例、「汝、知れりや忘れりや」(平家・三)、「現に見えら
に」(今昔・二五―五)、「ことのほかに侍れりけり」(今昔・一
九―二)。

(13) 類例、「もし『しろうるり』トイウモノガ」あらましかば、
この僧の顔に似てむ。」(徒然草)。

(14) 類例、「知ろしめしたりげなるを」(源氏・若紫)、「世に心え
ずげにて」(大東急本『住吉物語』)、「下句ニ」いかなる風情
句も付きぬべげに侍るに」(撰集抄・八―三三)。

(15) 類例、「同じやうに書かせ給ひて、あまた所へつかはしたり
ける。」(古本説話集)。

(16) 類例、「過ぎ(＝通り過ぎ)給ひぬるものを、やは帰り給は
んずる。」(発心集・五―一二)。

(17) 本動詞と補助動詞の間に係助詞が介入した例、「御方を頼み
こそ奉りつるに」(住吉)。

(18) 参考「何がな取らせんと思へども、取らすべき物なし。」(宇
治拾遺・九―三)。

(19) 類例、「柴の戸の跡見ゆばかりしをりせよ忘れぬ人のかりに

もぞ訪ふ」(拾遺愚草)、「いかにしてしばし忘れむ命だにあら
ば逢ふのありもこそすれ」(拾遺集・六四六)、「夜泣きすと
ただもりたてよ末の代にきよくさかふることこそあれ」(平
家・六)。

(20) 青表紙本『源氏物語』の「大臣に知らせ奉らむとも、誰かは
伝へほのめかし給はむ。」(玉鬘)が中古和文十作品中の唯一の
例外であるが、小田勝(二〇〇六)に述べたように、この例文
は河内本の「んことも」を採るべきである。

(21) 「上に」の意の「ものから」の類例、「あてになまめかしく
愛敬づきたるものから(＝上ニ)、らうたくこめかしきさまさ
へ添ひ給へり。」(苔の衣)。

(22) 類例、「日ごろえ申し給へでなむ。」(うつほ・祭の使)、「唐
の歌、大和の歌など、よくつくり詠み、給へしが」(今鏡)、「い
ままでながら、給ふるも、いとわびしや」(堀河院艶書台)。

(23) 「御十動詞」の例、「御かくさせ給へと申上候へと」(日蓮消
息・船守彌三郎許御書)、「しばし御抱へ奉るに」(あさちが露)。

(24) 中世王朝物語全集にも注意される語彙が指摘されており(二
八二―二八五頁)、一部重複するところもある。

(25) 三位中将(もとの田鶴君)の詞。公に対する私の意で、は
の意ではないが、文脈的意味ははと同意。『太平記』(卷三三)

に、「今夜ハ明月ノ夜ニテ候ヘバ、乍恐私ノ茅屋ヘ御入候テ、草深キ庭ノ月ヲモ御覧候ヘカシ。」の例がある。

使用テキスト

竹取物語・日蓮消息・撰集抄（岩波文庫）、枕草子・八代集・宝物集・住吉物語（新日本古典文学大系）、今鏡・古本説話集（講談社学術文庫）、愚管抄・太平記（日本古典文学大系）、発心集（新潮日本古典集成）、あさぢが露・いはでしのぶ・山路の露（鎌倉時代物語集成）、苔の衣（中世王朝物語全集）、赤染衛門集・後鳥羽院御集・西行『聞書集』（和歌文学大系）、古今和歌六帖（図書寮叢刊）、拾遺愚草（『訳注藤原定家全歌集』）、堀河院艶書合（新編国歌大観）、その他はすべて新編日本古典文学全集による。これ以外の諸本からの引用は、「穂久邇文庫本・苔の衣」のように依拠テキストを出典表示中に示した。出典名は、「竹取（物語）」、「後撰（和歌集）」のように「物語」、「和歌集」の部分を略して表示した。

引用文献

- 小田 勝（二〇〇六）『古代語構文の研究』おうふう
——（二〇〇七）『古代日本語文法』おうふう
——（二〇〇九）「書評」小久保崇明著『水鏡とその周辺の語

彙・語法』『日本語の研究』五二一

北原保雄（一九六七）「なり」の構造的意味』『国語学』六八
田淵福子（一九九九）『中世王朝物語の表現』世界思想社